

映像インсталレーション

Study for 『Geste zu Vedova ~ヴェドヴァを讀えて』

ヴェネツィアの抽象画家 Emilio Vedova(エミリオ・ヴェドヴァ)へのオマージュとして 2015 年に作曲されたこの楽曲では、音楽の中に潜む身体性を描き出すためにプログラマーと組み、新しい視点で音楽とダンスを思考した。譜面から弦楽四重奏の 4 つの楽器(第一ヴァイオリン、第二ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)の音の長さ、音量、密度をデータ化し、音楽と違った動きをする 4 つの音の拮抗する状態を「点」そして「線」で描いたダンスのノーテーションを考え。

描くことを目的として動く身体の部位は、自身を形成しているかのようで感覚的に今までのダンスとは異なった。第 3 番『胸裡』は抽象的に人物を表現しているが、『Geste zu Vedova ~ヴェドヴァを讀えて』では、可能性を秘めた身体そのものを表現している。

振付・構成・ダンス：小尻 健太

舞台監督：尾崎 聰

照明：伊藤 雅一（株式会社 RYU）

プログラマー：堂園 翔矢（『Geste zu Vedova ~ヴェドヴァを讀えて』）